

〈特集Ⅰ〉朝鮮敵視と日本の植民地支配の歴史を糾す

加速する「知識人」の知的・道徳的頹廢

——「忘却のための「和解」「帝国の慰安婦」と日本の責任」

『慰安婦』問題の現在「朴裕河現象」と知識人」を読んで

倉田智恵子

(本郷文化フォーラム女性労働研究会)



第二次安倍政権は、発足してから三年、軍事大国化と軌を一にして急速に「慰安婦」問題の解消策をこうじ、「朝日新聞」を難なく屈服・懐柔させ、うそとだましの「安倍七〇年談話」から日韓「合意」へと続き、もはや何事もなかったかのようなどころまで行きついた。

安倍首相と朴槿恵大統領は、「慰安婦」制度被害者の二〇万人の尊厳も想像を絶する理不尽な苦渋も意に介さない。米日韓軍事同盟の強化と日韓関係の政治的・経済的な「改善」を、なによりも優先させるのだ。米日韓の支配階級にとって被害当事者の声を聞くことなど、はなから必要のないことだった。今すべきことは日韓の「和解」。これしかないという

声が日本中を覆った。

日本の与党、野党もマスコミもこぞって日韓「合意」を好意的に評価したことは、多くの日本「国民」の、「もう慰安婦問題を終わりにしたい」という思いを反映している。それは、同時にそれだけ「安倍七〇年談話」にあった「あの戦争に何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません」という欺瞞的な言葉、つまり今後一切謝罪も補償もしない、戦争責任はとらないという安倍政権の真意が浸透した結果でもある。

わたしの趣味の合唱サークルの親しかったピアニストは

日本軍「慰安婦」制度の事実を知ってか知らずか、「あの人たちはいつまで過去にこだわるのかしら。お金がほしいだけでしょ」と言っているの、わたしは激怒し、絶交しサークルもやめた。日本の侵略に興味を示さない。もちろん加害者としての認識もない、このような人は彼女ばかりでない。日本軍「慰安婦」制度への無知・偏見が、浸透しているのだ。無知・偏見によって安倍首相の言葉にまんまと乗せられてしまう。

日本軍「慰安婦」制度の事実を一人でも多くの人が認識すること、そして、その責任がどこにあるのか、原因はなにかを問うことによって被害女性たちの真の姿が伝えられなければならない。野獣と化した皇軍の蛮行によって踏みにじられた生涯を被害女性たちは取り戻すことができない。その痛憤、無念さを共感できる世論をつくりださなければならぬ。

わたしが、朴裕河の名前を最初に聞いたのは、もう韓国へ帰ってしまったが、二年前まで習っていたハンゲル講座の先生からだ。朴裕河許せない」と会話の合間に、「日本も韓国も両方悪い。だから和解せよ」という本が、日本で賞までとった」と怒り、そのあまりの勢いにたじろいだことを思い出した。その朴裕河の『帝国の慰安婦 植民地支配と記憶の闘い』は、前作の『和解のために』より日本での受賞の数も増え、商業紙各紙および高橋源一郎、鎌田慧ら「リベラル知識人」が絶賛した。

韓国においてナムムの家に住む被害女性から「慰安婦」

たちが日本軍の「協力者」であり「同志」であったという虚偽の事実を流布された」と損害賠償、出版差し止め、名誉棄損で訴えられたことよって、さらに話題を呼んだ。その後、ソウル東部検察庁が朴裕河を名誉棄損で起訴し、その起訴に対して小森陽一、上野千鶴子ら日本とアメリカの五四名の知識人が「言論・学問の自由をおかす」という抗議声明を発表した。

なぜこんなにも『帝国の慰安婦』朴裕河が擁護され、もてはやされるのか。日韓「合意」を圧倒的多数の日本人が評価する背景・要因はなにか。

これらの事態をとことん追究し、歴史修正主義者、「市民派リベラル」を徹底批判した二冊の本が日韓「合意」後の春相次いで出版された。

『忘却のための「和解」「帝国の慰安婦」と日本の責任』鄭栄桓著と『慰安婦』問題の現在「朴裕河現象」と知識人」前田朗編。

歴史修正主義にとりつかれた「知識人」をただす

『忘却のための「和解」「帝国の慰安婦」と日本の責任』の著者である鄭栄桓氏は、専門が歴史学、朝鮮近代史・在日朝鮮人史であるが、『帝国の慰安婦』への「日本社会の異様な礼賛ぶり」と訴えた被害者たちへの非難を放置しておくわけにはいかない（あとがき）と喫緊の課題として検証を始めた。

『帝国の慰安婦』を逐次引用して朴裕河の主張を明らかにした鄭氏の作業は、氣迫に満ちている。

『帝国の慰安婦』を知識人たちが絶賛する理由の一つは、朴裕河が用いる言い回しにあると鄭氏は指摘する。つまり、「矛盾する叙述が遍在」し、「重要な概念を独特の意味で用い」、「言及の対象が必要以上に抽象化され」たことが誤読を誘発していること、そして直接交友関係のある者は、真意を押し量り好意的に評価すると。さらに鄭氏は、朴裕河が「慰安婦」像を修正したことは「不正確な歴史認識が拡大するのみならず、戦争責任・植民地責任に関する認識に多大な混乱をもたらす」と強調する。

鄭氏は、『帝国の慰安婦』事態とは、「日本軍無実論」による「大日本帝国」肯定願望と「戦後日本」の肯定願望という「二つの歴史修正主義」にとりつかれた人びとの欲望が生み出した産物」と分析する。

朴裕河は、日本軍「慰安婦」制度を戦争犯罪とはみなさない。そして、日韓請求権協定による「経済協力」を「賠償」「補償」と認識する明らかな間違いをおかし、植民地支配責任論を歪曲する。『帝国の慰安婦』のなかにある植民地支配の問題とは、「朝鮮侵略の罪と責任や戦争犯罪・植民地犯罪を問うものではなく『慰安婦』の歴史を『日本人の歴史』として語り直そうとするもの」と鄭氏は看破する。

『帝国の慰安婦』は、二〇〇〇年に開催され、昭和天皇と

国家に有罪判決を下した女性国際戦犯法廷についてふれていない、という指摘も朴裕河が日本政府を代弁していることを示す。「責任者処罰」や天皇の戦争責任追及について朴裕河は、「激しい反発を示す」のだから、当然、女性国際戦犯法廷を問題にすることは自殺行為だ。世界的に高く評価され、人権の運動に多大な影響を与えた女性国際戦犯法廷が果たした意義・役割は大きい。だが日本のマスコミは当時から、この法廷の扱いは小さかった。

歴史的事実が不正確、かつ杜撰で、研究倫理の上でも問題があり、概念内容のすり替えも巧みではない『帝国の慰安婦』に真摯に向き合えば、朴裕河の「真意」は苦もなく理解できるはず、それができないのは日本の「市民派リベラル」がみずから退廃し転落したからだと言及している。

結果として安倍政権、国家権力と対峙せず、許容し媚びる「市民派リベラル」はとどめなく落ちていく。そのような「市民派リベラル」を生み出すのは、自覚のないまま一貫して戦争責任を果たすことのない一般庶民の支持があるからだ。「朴裕河現象」に歯止めをかける上で重要な視点は権力に媚びず階級的な利益をどのように考えるかである。

『慰安婦』問題の現在 「朴裕河現象」と知識人 前田朗編は、「歴史認識そのものが大幅に崩れていく事態を前にして、予定を大幅に組み替えて出版」された。四部構成されたそれ

ぞれの論文は、様々な角度から問題点を追及しており、これまでどのようにとらえたらよいかわからなかったことが、ああこのようなことなのかと合点がいく内容で、胸のすく明解な編集になっている。全編から深刻な事態への解明を急ぐ緊張感が伝わってきて、一気に読んだ。

容赦のない「知識人」批判

「合意」以後、「慰安婦」問題の解決は遠のき、このままいくとあいまいなまま事態が過ぎてしまうかのように思える。しかしながら、前田朗氏ははじめに、「被害者抜きに日韓間で『政治決着』をつけようとしても『慰安婦』問題は終わらない。日韓『合意』は虚妄の『合意』にすぎないし、朝日新聞記事訂正問題も、『帝国の慰安婦』も問題の所在をみえなくさせる役割を担っている」と言明し、さらに韓国と日本の一部知識人たちが、「内容を吟味することなしに『言論と学問の自由を守れ』を主張」することに傲慢さがあらわれている。名誉や尊厳を損なう自由が保障されるわけではないのべる。また、日本政府が、被害女性に謝罪も補償も行わずに、責任をとらないまま四半世紀を徒過することを許してきた日本国民の責任を、自覚する必要があると日本社会に責任を問うている。

「第二部 朴裕河現象を考える」では六人の日韓の研究者が痛烈に朴裕河を批判する。「歴史の事実認識についてあま

りにも杜撰。最初から和解論に親和的な日本側の知識人らとコラボレーションした、政治的な意図をもったパフォーマンズ」「日本で受けた後光を活用し韓国の知識人社会に食い込み大衆心理を巧みに活用して自らを目立たせる」「なぜに選考委員諸氏のような見当違いなコメントがいくつも出されるのか。実証的な検証能力をもたない委員らが朴のレトリックによって煙に巻かれたのではないか。和解論を待望している日本の知識人らが、我が意を得たりとばかりに歓迎したのではないか」など、朴裕河の欺瞞性を暴露する痛快な論文が続く。

二〇一四年八月、『朝日新聞』の木村伊量社長が「経営上の危機管理案件」と位置付け、安倍政権の圧力に屈して（第三者委員会報告書による）吉田清二氏の証言の関連記事を虚偽として取り消した。しかし「吉田証言」は本当だったことが、その後の調査で明らかになった。『朝日新聞』が虚偽と判断した八つの理由への反論を公文書、目撃証人によってまとめた。第三部の著者であるジャーナリスト・今田真人さんは、公文書を探し出し、分析する実に困難な作業を執念で行なった。「吉田証言」を葬ろうとする権力へ正面から抗う貴重な再調査である。

「第四部 植民地主義と知識人の責任を問う」では、徐京植氏の「日本知識人の覚醒を促す 和田春樹先生への手紙」と前田朗氏の「慰安婦」問題と学問の暴力——植民地主義

と暴力」の二つの論文によって現在起きている現象を分析している。和田春樹氏へ徐氏が「アジア女性基金が受け入れられない理由を真に認識しておられるのか。先生には朝鮮民族の心が見えているのだろうか」と問い、アジア女性基金の活動は日本人がみずからの良心を慰めるためのものだった、と和田氏の責任をただす。

また、「朴裕河現象」については徐氏は、「朴教授の著作はひとりの風変わりな人物による非論理的な主張であり、端的に



いうと国家責任否定論の一形態にすぎません。しかし笑って見過ごすにはあまりにも深刻な傷を被害者と運動体与え、反動の波に乗る日本の歴史修正主義者と韓国の保守派を励ます機能を果たしている」と簡潔に断言している。

この「手紙」形式の論の展開は、余りにも明解で、心から感動した。前田朗氏は、ソウル

地検を非難する小森陽一や上野千鶴子らの抗議声明は、事実誤認に基づいていると抗議声明の内容にそって具体的に批判した。「抗議声明は慰安婦問題について議論しているにもかかわらず日本の朝鮮植民地支配や中国侵略意識がまったく希薄である」。そして抗議声明は被害女性（ハルモニたち）の主体性を否定し、都合の悪い事実を隠蔽した上で、植民地支配した側の「学問・言論の自由」の優位を主張する。

九〇年代から国連機関で議論されてきたこととして前田氏は「慰安婦」問題は、植民地解放闘争と女性解放闘争の重要な一部であることを強調した。

あとがきで前田氏は、「慰安婦」問題の隠蔽を安倍晋三という個性に見てきたきらいがあるが、より慎重に見ておかなくはならないのは、勢いを増す現代世界のグローバルな歴史修正主義なのだと言及した。植民地主義の撤退か、再興かという問題は示唆に富んだ視点だろう。

この二冊は、「慰安婦」問題の真の解決をめざし集会・デモに参加しはじめてまだ三年のわたしにとって常に手元に置いておくべき本になった。

『忘却のための和訳』『帝国の慰安婦』と日本の責任（世織書房刊 一八〇〇円＋税）

『慰安婦』問題の現在「朴裕河現象」と知識人（三一書房刊 一八〇〇円＋税）